



全拾冊曲亭主人著編  
 里見八犬傳第八輯  
 卷之三拾下  
 願人板元  
 丁子屋平兵衛  
 上帙五冊



特別  
 14  
 600  
 1



曲亭主人著編

# 八犬傳 第八輯

柳川重信畫

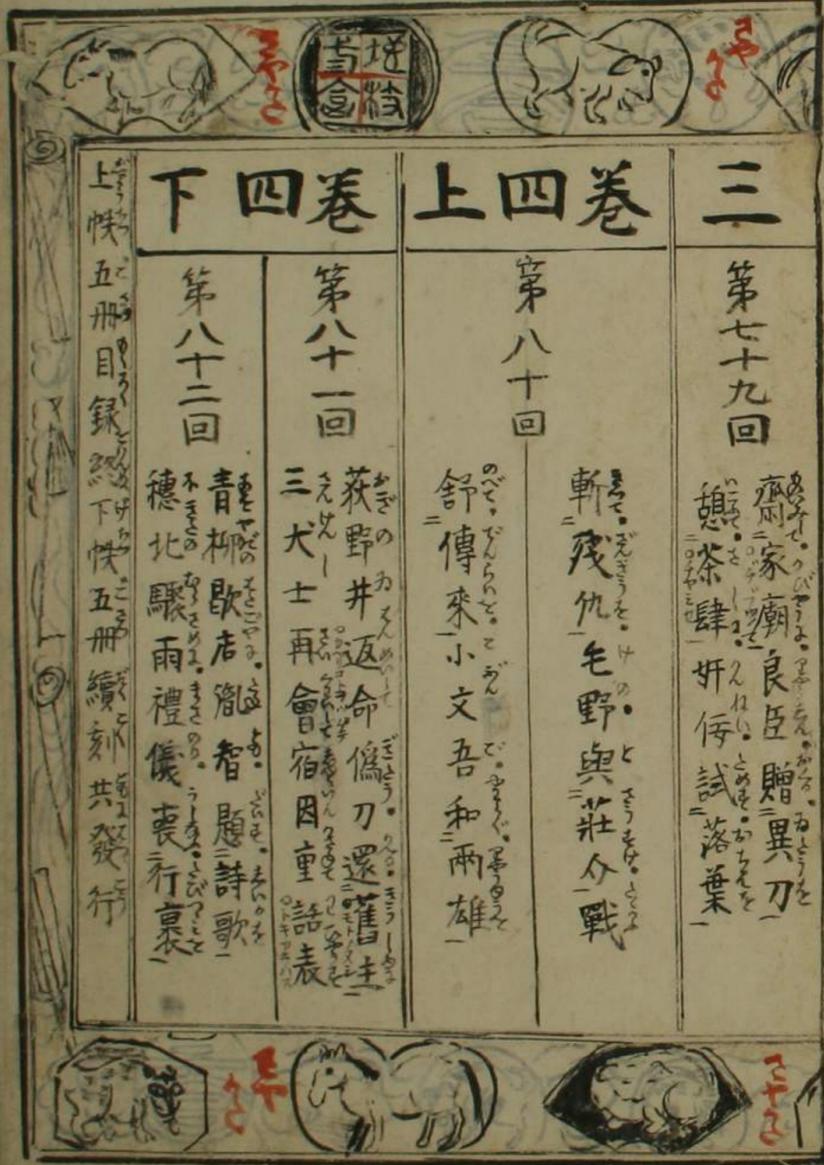
上帙

江戸書林文溪堂精刊



三	上四卷	下四卷
第七十九回	第八十回	第八十二回
齋家廟良臣贈異刀 懸茶肆奸佞試落葉	斬殘仇毛野與莊介戰 舒傳來小文吾和兩雄	荻野井返命偽刀還舊主 三犬士再會宿因重語表 青柳歇店溜智題詩歌 德北驟雨禮儀喪行哀

上帙五冊目錄下帙五冊續刻共發行





南總里見八犬傳第八輯下帙五冊總目錄

卷第八十三回

得失易地勇士過危

卷第八十四回

夜泊孤舟暗資勇士

卷第八十五回

傾志夏行留四野

卷第八十六回

道第再謀復歸

卷第八十七回

照薰火勇僧入狹穴



八犬傳第八輯自序

曲序主人江戶隱士也別號多有平居綴文處為  
 著作堂其次名小書齋為鷲齋繙國史舊錄奇文諸  
 雜書時號彫竈閣儒書佛經諸子百家之書時號玄  
 同自序於裨史小說時號蓑笠耽戲墨時號曲亭編  
 兒戲小策子時稱馬琴下俚巴人其曲不高和者彌  
 衆是以馬琴曲亭二號著于世云  
 陳湯傳及大明一  
 統志馬琴取野相公索婦詞句以命之相公詞曰才  
 非馬卿彈琴未能身異鳳史吹簫猶拙見菅原為長  
 十訓是它有雷水狂疾用半間信天翁愚山人最號約

十訓抄  
作者名  
見徵書  
記物語

一十二號。皆臨時隨意。莫弗畧笑。或笑其別號之多。主人乃辨之曰。古人有表字。而無別號。或稱本名。或以所居地名相呼。近世別號。始自儒流。間亦有堂閣樓臺。精舍草庵。則名此而號。某堂某樓主人。此後世有別號。所以至二三不足怪矣。時好名者。相羨以爲雅事。因無其堂閣樓臺。亦自號某堂某樓主人。夫有名而無實。是爲虛名。虛名與身俱亡。不傳于後世。雖有十數號。與坊間記本錢字號一般。非但文人墨客有別號。貴賤有家號。又有綽號。萬物有方言。多異

名。至諸家本草。乃藥物異名最煩多。非學而得焉。識別殆不輒。故老氏曰。名可名非常名。漆園亦曰。名實之實。名實兩忘。始可知。非常之名也。由此觀之。余之有十數號。猶無也。古之高人。許人聞名。不許人見面。余胡爲望高人。然惜身而不思名。比肩於裨官者。流而意織筆耕。不數造化。小兒與之爲狡獪也。豈思名者所度。幾能察是意者。可俱評。稗史焉。未得是意者。何憑知作者之觀世。寫情有富言。以獎忠孝。戲謔中辨真偽。猶且正是。非昭法戒。又善懲儆。惡禁竊盜之

旨哉。雖然集虛假之詞而綴虛假之文。事之與文。素  
所無之。徵諸筆。骨字。抑討於南柯。字。骨中有物。則求  
之于內。骨中無物。則求之于外。內外撮合。然後許多  
脚色出焉。於戲。噫嘻。誰徐悟。立談之旨。於言外。世人  
多不思之好。閱稗史者。當喜虛假之詞之奇。中出奇  
且有平情。善狀可笑。可悲。可怒。可罵。之間。合已矣。不  
閱者。不擇巧拙。又唯謂虛假之詞之誣。世惑俗一毫  
無益於名教。而擯斥之。至甚焉者。燒琴烹鶴。其故何  
也。為膠柱不解。不悟幻境為仙家。除此之外。厭常喜

怪。是故徒好聽鬼。而不樂觀鬼。昔者葉公好畫龍。而  
懼真龍。當時呈畫龍者。賞矣。真龍者。黜矣。余亦為  
婦幼。呈畫龍也。久矣。尚幸不能致真龍焉。此拙編所  
以行于今。儻有與余同愚者。而思及于此。乃觀畫龍  
如觀真龍。其油然有所感。而肅然知所懼。一日有客  
余對客。齋談如前條時。八犬傳第八輯全稿方成。欲  
序未果。即次是言。代序以顏于簡端。  
天保三年如月望  
菴笠漁隱撰

軌總見八大傳第八報上快五上總目錄

卷

第七十四回

牝牛懷順 舞答歐錢  
卸初磯九 墜殘雪害

壹

第七十五回

趕醉客小文吾遇次團太  
懷短刀假瞽女按摩大田

卷

第七十六回

庚申堂俠者囚賊婦  
廢毀院義任送橋魚

式

第七十七回

盡眾賊酒顛舟旅舍  
傳內命由亮招二客

卷

第七十八回

北母自恣賞罰  
東使雙賜首級

七

第八十回

湯嶋社頭才子賣藥  
聖廟老樹從者走猴

上八卷

第八十九回

聖廟功義俠軍寬囚  
詳和策忠款劍奸佞

下八卷

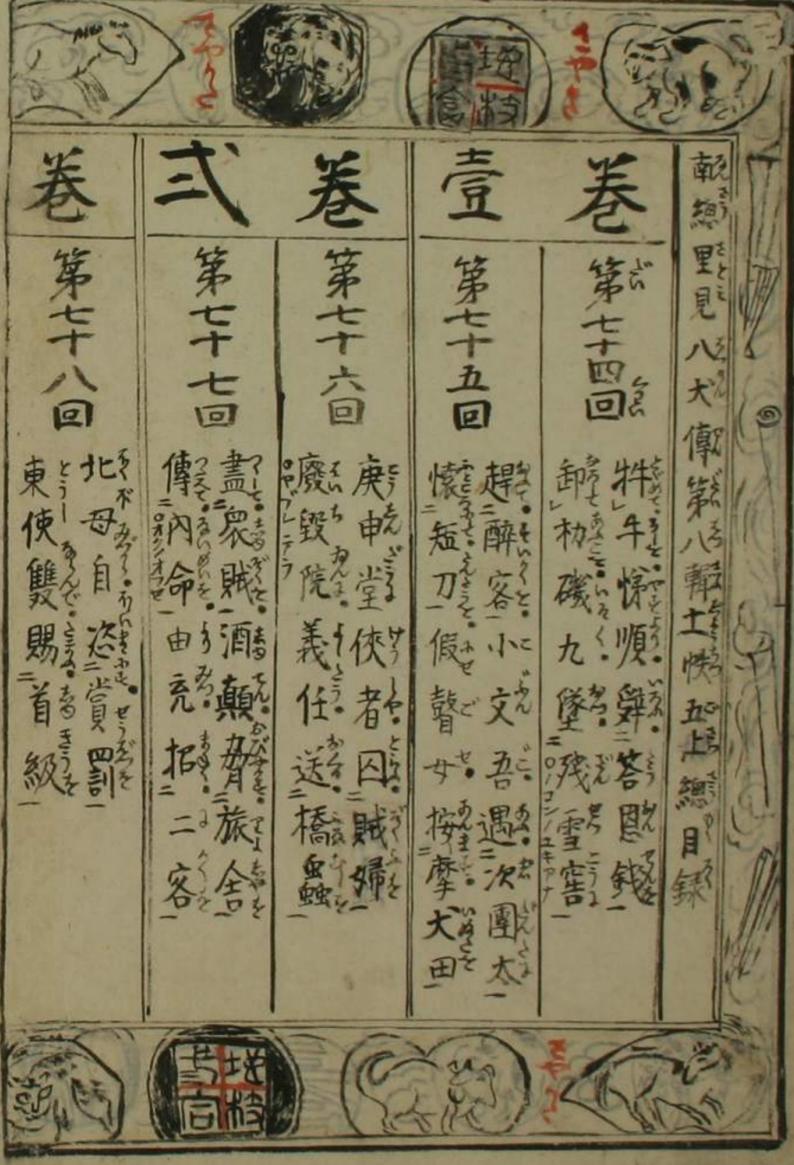
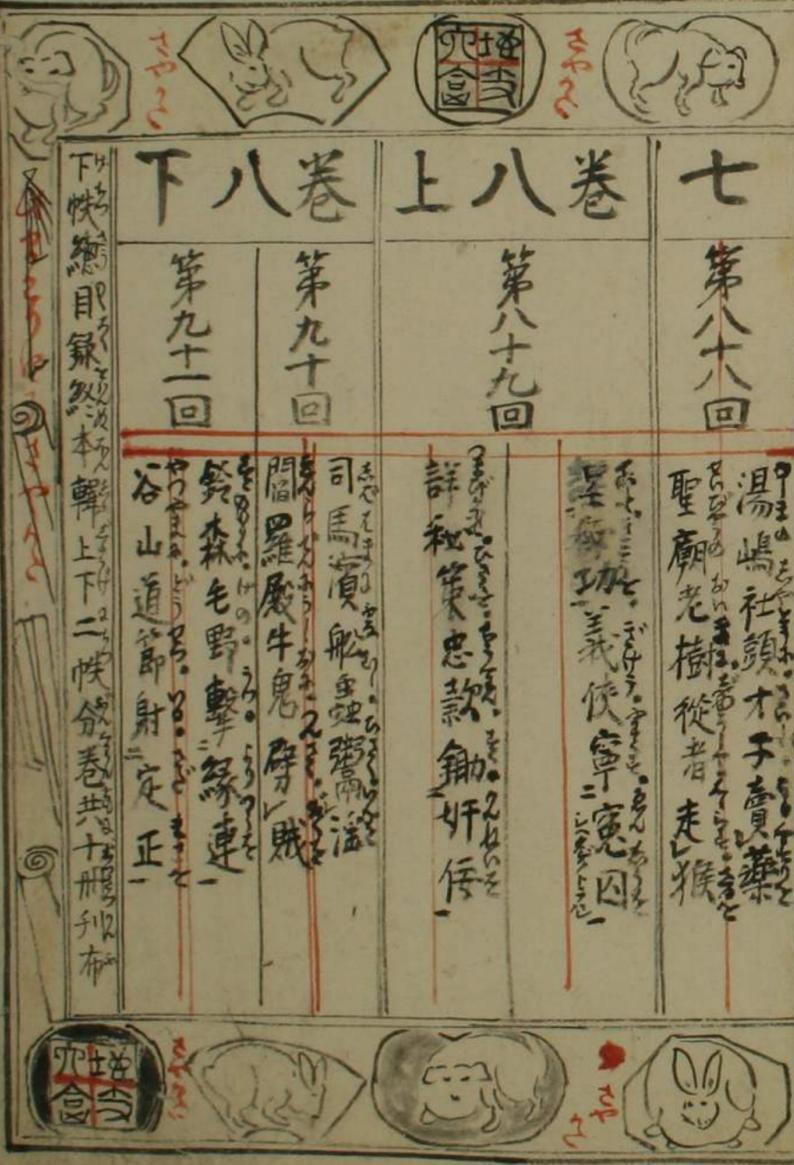
第九十回

司馬頂船重運  
間羅殿牛鬼摩財

第九十一回

鈴森毛野擊緣連  
谷山道節射定正

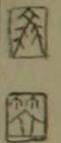
下快總目錄然本解上下二快分卷共十册刊布





童子籠子酒  
朝二

あれさあんの  
わふ友  
さあのもろ  
えてのふろ  
袖そぬるを  
ゆた



殿守 殿守

あつらひのまの



暖大刀自

京北割居  
長氏之母  
全廉龍訟  
賞罰赴赴良佐六編夏  
魚龍出器雖權似  
君馬有谷

箱戸津備  
由元

あつらひのまの





虫干  
 打丸  
 之みね  
 全  
 打みそ  
 女  
 ぬい  
 袖垣

落點餘之七  
 有種標也

標野重戸



人而獸性  
 牝牡相憐  
 野狐鼠怪  
 屠戮可駢  
 省戮可駢

秋野三郎

西僕爐内

うねれを

水垣残三  
 夏行



権且牛と疲しと被さるる声と共に烈火修煉の剽姚左推せし右へ操回したる  
打掃の本支不熱も悍る須本太牛の鉈や頑童不放下る棋見の似く地响拍七撞  
と仰反倒れしを相まの感も感も喝と米声研は答る響く要時鳴も  
アける登時力士が答り走り鬼の力と勤し牛の四足之振るも又罪九と掴むありて  
毛も糾る牛磨子難の相まの感も感も喝と米声研は答る響く要時鳴も  
楚と敷着て哨子鳴らる牽起せし牛の終鎮り身振りの五時小文吾を  
アそく恐れし兩三歩返巡り牽牛を隨て石谷々と葉音は退り有伴程は支費  
案内は五時磯九郎の舟中果て又立取る衆人と共信は同途は小文吾の勇敵奮力と  
目撃するも死酔の如く初階の後又噴又面と起し心は支鎮る  
慌しくも相人を控分り牽り近つた小文吾は声を折りし折るべき勢は演  
るも那大力士牛裁判の二頭の牛の主とえ須本太角連二と先をす

合笑をさし出る皆小文吾は對ひ跪坐す存一額をつらへ俺のけの結番の此彼  
二頭の牛の主出倉村の須本太郎逃入村の角連二並に大力士某甲某乙某裁判の  
いへ當所の年の角突の年毎に間あるけの牛の放りすあり又昆牛も放りあり  
牛力士の修煉しと軀を捕料しひ須本太牛の龍種をれや果れ出せし牛乗  
ら不慮の幽劇を及び鬼神を起し鬼の勇力轉く牛と推演し那厄難を鎮め  
ひ御恩の三回山も高く又衆人の飲ひ筑摩川も深高へ小坪で鯉を捕りし  
朝夷之郎義秀も牡鹿の角を裂きたる泉小二郎親衛も皆是れ世の人をいへ虚実  
いふのあへん賢惜の力量眼前に親しく知ぬ今も亦任る勇士の在  
さる不思議願へ本貫の尊那旅館を巨細に名告せの記録を留めし後を  
まの語柄は做しとてと懸念する言語有一二同れ大田の客を候し持  
出る磯九郎の舟中果てと誘ひし須本太角連二と先をす



和とらるるを  
本太郎の合笑を  
領に現鐘を  
只の御酒なる御意  
又更の最の奥の心地して巨摩子と持り  
程は須本太牛と操倒るる大力殿  
橋下結鐘草種  
途ゆく今宵の所夢ありと偈  
小文吾の牛裁判  
田舎の殊は長閑  
卯第二の長  
宿所報

能大なるを客房へ  
子も屋敷生を捕鐘  
まぬ酒杯  
あつ況牛を出  
とよまは  
大田を稱  
あつ人より先  
めく小文吾  
目取  
まの思  
次房

おぼしき共侶を唐るのみ今主人の首をやく相成かぬ東西のあれと早者に向折るれ縮み  
魁御旅中の汗衫を袖に巻いて鉄の當所の恒例ある展来する牛を幸しく捕獲せぬあの時  
牛のまわり物とて之賀文とをなす遠きけの展来牛の力士に力士の意を察せられしは  
美及びを料らぬ大人の御助力も辨立地は鎮まらぬ御主人の御用  
ひ折れせぬ敬るる東西を吐きしめりて受取ぬる主人の御用  
思ひまはるるを兼引ぬるか口説くを小文吾が又要る人情に御向  
既におけりて武士のめが展来牛を捕獲せしめり然るも功とせぬわむ那折牛を特  
めりて俺身も夫度は突倒され傷つてもありぬ今此の人の與のさあが這身せり  
改るるを約束違ひて直感も力士のせりて只是意外の恨をなすまの決りて受  
取と推辞を多し破九郎り折敷掻遣り我に出る袖巻揚り小文吾と信と睨て  
首を小文吾に可憐に刺すわねと大人の予簡直さるる富房も幸ふる小文吾の資

助はまりやがく報ひを自辞とわいのを小可は任せぬ今より小文吾の受取ると可司を  
足せり差込せんとくを小文吾冷やひく何と和まぬるりわん角力の折箱と名を吹鳴  
呼ぶるごとく禁裏の破九郎り耳の中も櫛を酔らぬの癖を理をれとに思由くと繰返  
し高敷年の小文吾の只果れ果る取るも足ぬ解狂人と口角の互争をなす小文吾と  
いなを牛裁判のまき酔ぬ酒よりや真醒る此彼ひく破九郎り推鏡んとて打擲る  
透木の舞のなや果しめぬ殺風景は主人のいづれ月昔くもひり小文吾と怒めり人も  
我も酒を怪しみのゆゆせ宣分まるりかよ舞するも柔和なりしも許は怒るる威狂水の  
牙をなすゆゆるる櫛のしそ且く舞の鏡をまけしと徒然とて文吾の別席を脱湯  
清の夕飯をわくもへ北門のまの編小の義澤舎小庭あり北門の風土あり櫛も  
梅も千葉紅梅も昨今一度の昏闇を茶の軒端を燦爛とて黄昏及びひかり折る  
雲を月夜を聊眺るるなあを誘は安肉と侍ん立せぬと正首を心づくと小文

吾々の精進と云ふは且つ這里を外に好廟間をとりつゝ遠く  
刀引提ぐまはりの余程に破九郎の小文を這上布に在りては誰かの憚り  
わづらひのまじりて罵り狂ひて牛裁判の意見を用ひてまじりぬまじり  
各々のりてまじりても咱の哥をいふまじりてまじりて地方で一二と指し  
又これに足る牛の一箇や二箇組止りて日かんとて火家の回背を言首へ  
清めも個破九郎と客人の御導を立たし這首の主人か恩義の剛ひを  
縮と樂錢と受えらるる損をて思ひて哥をいひて牛を一本は買ひて  
肩をいふまじりて宿所へて又客人が人柄を空辞退りて果は咱の  
哥をいひて日暮ぬ向快刀へて錢も縮も兩個に分り被借りて裏と席  
草と設けりて言首と牛裁判の和諭と和主のしを理りてねむる用ひぬ  
よのよのりてまじりて這里をいひて小土合まじりて一里や二里の路  
おのりて

擔つて通宵まの益をり所然とも羽立まじりて俵は馬を尖りて駈りて  
夜中比必届のぬれぬれと俺の住りて和主の快刀被りねやと喃々と  
左を破九郎の半分を疾視のりて牛を起りて馬を尖りて何れは  
和主も連踏錢小角力も取る俺も重荷とせりて初九日ありて真夜中  
まの月ありて足はぬれぬれ五里や三里と走れりて甚だりて快擔  
遞手むと頼りて狂生酔も悪者錯後卑劣の本性留りて牛裁判の  
難難むまじりて是非のりて教の目録まじりて恩割り及び裁判人の  
本と主人をたらしやて置りて遣りてまじりて高量な本命の二両  
赴けりて被り草をまじりて程の自餘の破九郎とまじりて推  
鎖めりやと破九郎の信和主の望を儘して錢も縮も擔為りて草鞋  
身装へりて出たりと破九郎の二重衣擔荷をえりて是れが熱

罷罷ん客人も主人もさうさうしてとどろくを庭門よりと舞をやるんか先ん走り  
推用く胡枝の折戸も巻石近縁類ありや破九郎が裳衣端折草鞋を穿て不端まで  
邪魔する中刀取りくも侍を裏の上は挿む程面を二又の村の雨輪耶と中楊で兼せて  
遣り重擔之肩に受てり物もさう血氣の壯気候體なう出りぬと智るくさひさ  
裁判人ハ目送り果て舊席に坐せり酒客は怖れ次房へ避き給侍の煙  
們と共所願出まも亦復酒を着る牛裁判人ハ破九郎の噂をうつ腐木對  
ひつらも醉さる小昔文の錢をうて夜行を遣るん覺とて詭をみて見隠れは送り  
かてそちのれは這まを圍入まうしてよと心居屬れと小所人ハ破九郎が人なる似而非廣  
言と憎ぐる生心や早あれまど偏主も奥よりぬれりよと侍と執事あつた  
けり有徳一程は小委五口又那乾浄舎まで夕饌をうてあつたうと半响あま  
よの夜初更の比及主人引れて又舊の客房にまよれれば牛裁判人ハ破九郎の舞の

趣箇様々々徳を有りたを報知する小文吾少の驚き江々々々あれ這首よりて  
小千谷まう一ニ里の路あり況千限の夜河の醉狂人の錢帛を擔て一個の危を危や  
絶望のあつとも地の乾次因太の市人をも使氣ある情由を知り其の財帛を愛  
夜啼は一個破九郎に還りかけるといひやまんの取か一時の聊移りとも酔たもの  
とあれが遠く去へくも快趨田んと立場を頼本太郎推替の言ふすの理りなれ  
かみか趕せりあつた及び侍僕輩をまうてん裁判連も心つたうや世も中ねが  
と切く小所二兩名も俱に遣りたるとするを大家のあつた存を侍の危を  
あつた人々も徳まとのひつとつひくと多身癡氣膳の長中でありぬ奥へ通達せりし  
今まであつた不及れり兒と頼る主人の眼を睜りて多那奴の守用へ快甲もあつた  
子提燈撃してまうと頼る焦燥を呼ぶと小文吾村あつた且守りへ禁個人をま  
し引戻えんとせりも侍僕あつたあつた破九郎のあつた云と強情張て往へ



雪の  
ついで



山中田  
とまんと



登時機九屏のひびきたる吸声の騒然と且怪しく言は四下と見えれども人影のあら  
原來是狐狸の令倦か疲勞れて悔しく心の空虚を帯け魅の所と做やあんと鳴  
呼んと罵り相推致する遠く眉毛を摩啞と海子くゆさび切よと掛り快握人  
とほ程は亦復喚聲頻りに起り助けんと叫び破九郎のいよましく疑意を去り  
ゆやど隈る月と燭とを月被被と看回しとあ声正しく樹下多る強疾の進ま  
る人土中をあゆと歩み形状のあゆもえさけり越子熟す思て做まよふと北園の  
習俗あふ冬春雪の深か比猶戸の雪を空で空を越りやくその雪空を射屋  
鳥と捉ると毎あり今四月の初旬も里を雪が消果れども日光は疎に巨樹の下  
サ敷蔭をとりある月雪の小山のどく残るあり仕れり那里にあらればまじく鳥を捕まの空作  
ある雪空ありやあんとえ熱か夜行をせしもの慙々件の雪を階りし方出かた  
人の扶助を求むれ亦知まべしとどくとのひくも着るわこまきりて果し雪

雪へ下り漸々解初見ゆま深くなり足なれも上りる曲腰の如堅うし且滑りあつた  
違ゆりきと知りあつたまを空に墮し其るものや声正しく婦人子似たり何故の故  
友を雨と獨あらしを過る情由るまやわがわかとと声振降りて喚り同へ空内より  
答へて疑ひもあつたまの千隈の川邊を農夫某甲の妻は佇りけり那下村  
るの陸上廟祭祀で佇り牛の角突と親は田に其の昏時未だあけ遠邊をいと空を  
交響も逐れ狼狽らぶらぶらもあつた同は陸上とせり程子身の雪を階りし方出かた  
はかりなれん心ゆく驚き夏受ひ人の扶助を候めり日の暮るれに狂還り絶て声  
喚や二响許悲しめ俤りあつたてを空時のあつたてを扶揚を身にか宿所を還り  
まは人さ苦くあつたてを先とをいびくと哀とをう伏舞ひぬえのとも声は後  
階りてあ夏受古ゆくと破九郎のさむく鎖をき亦不慮の伏難く雪の飛せり  
暗るれん蛇もあつた人那雪類吹あつたてを空にせりあれども偕る雪を階りし





第七十五回 醉客を起て小文吾次園太子遇へし  
短刀を懐ちて假替女大田を檢摩せし

且説毒婦船虫が何の程か執後未だ又強盜の妻より良人と信は右の如く大  
 悪事と做り縁故と看官猜しの事へ原る船虫の橋は信濃の香掛あり  
 籠山逸東太縁連を誑きり那木天英の短刀と盤纏三十金を奪取  
 當晩旅宿と逃亡し足は信濃程に當時越後半圓縁連を主分け長尾  
 早春の所領ありと知すは忌むるなり那里に米魚の御るれ由縁の人のあを  
 とも這身の所寓と討つ便りもんと云ひ傳知らぬ山路を辿とも能て越後まで  
 あり彼れと於海に有る一日古志郡の金倉山の麓路を過折るを剪徑の  
 撞見し懐ちて金を奪取らんとつ折賊一人ありければ船虫も木天英の  
 懐刀を引抜き且く挑戦して件の賊のめをもせり竟に刃を奪取り金を遣

十二丁ノ十月廿一日ヨリ

多く略りて然るも船虫の女流に似ければ胆勇の舉動必ゆ感し敢亦これ致すを  
 且の獨行とす。東歴と語り敵御の武藏のめは近目良人と表されれば  
 猶と討んとて此の由縁と心當り遠く這地來つれば命の命亦せと去りて迹絶れ  
 之の公馬も柵下子雨漏り進退難儀の折に陸奥の母黨の親族あれが那里を投て  
 せしやと人も般纏りてその其の由縁も知らずも思ひ濟論の這身の入と知る人あ  
 らば詭を哀れとらんけん鬼の目も涙あり地獄も佛もなまを願つ目今略れよ  
 金三が一ツも分ちて返りし口は信也。右左談と強盜少くもうんわの越一箇の  
 商量あり俺の赤いぬ此女房を表ひて聲の脱剣を奪るなり。短刺新水の枝のゆえ  
 出綱共極く便り俺身分今年四十二歳和女郎も四十許なり。信也が此後羊庚門第  
 相成かばとんべ和女郎今より裁易く俺と夫婦をなす常舞舞羅子と寵愛せん  
 このんふ。這商量も兼むと舎家なき口説けり。現に肩冠敵を揮きむ六郎女の夫を揮き

とよふ節語に似る船中舟の肚腹を尋ねて、襲ふ船の楫を捲くよふの岸もるたふの物も偷  
児にとり来引る倦身の夫は、我まん後、いりあれ望不任、中程を夏を轉し、驢と做  
まは度り、思念及ぶと胸を決め、うち領死神の結び、過世あり、いふよりの食ま  
るまら、否、あらあ、伊奈舟の最上川の陸奥へ、いりあれ身は従り、心る、毒木のひま、う  
勢、強盗の氷入る、布金齋と毒と取ると、心地、熱く、宿所へ伴去ん、這方、来  
ませとて、掖、小千谷の、わ、又原、強盗、童子、酒、顛、二、強  
一所、不住の山、家、時、戦、國、の、治、習、か、神、社、弘、周、中、軍、兵、の、乱、妨、と、免、と、類  
破、及、ぶ、ま、の、中、小、千、谷、と、塚、の、山、の、間、山、院、の、荒、れ、を、住、ま、り、あり、あれ、酒、顛  
二、三、芒、院、の、庫、裡、か、傾、か、る、月、送、り、と、酒、已、任、所、可、作、あ、時、博、徒、を  
取、合、て、夫、妻、道、の、技、不、取、勢、折、夜、押、れ、山、而、立、人、の、家、有、を、耦、今、梁、上、の、君、子、と、有、る、夜  
の、三、舟、船、中、を、妻、お、せ、より、同、氣、必、相、求、り、同、病、必、相、憐、む、牝、牡、一、對、の、珍、賊、を、れ、夫、を

合、け、共、信、は、屋、悪、意、を、做、を、程、の、日、も、相、川、を、賊、路、を、文、婦、竊、は、謀、合、々、破、九  
郎、を、殺、折、船、中、を、奪、取、を、賊、を、刺、た、短、刀、是、則、別、刀、ま、あ、ら、ぬ、羊、香、掛、を、  
縁、連、と、誑、を、金、中、共、は、耦、取、ま、木、天、夢、丸、の、短、刀、船、中、越、路、を、流、寓、ひ、酒、顛、の、  
妻、を、る、後、も、外、さ、つ、と、あ、毎、子、那、短、刀、を、懐、か、り、身、を、護、り、做、せ、と、を、害、心、あり、の、傍  
害、あり、と、信、と、と、わ、い、へ、ん、同、話、休、題、介、程、小、文、吾、ハ、ハ、夜、頻、り、破、九、郎、を、起、留  
んと、と、ひ、牛、共、判、判、甲、乙、と、宿、太、太、家、の、僮、僕、輩、の、從、ひ、ま、る、毒、木、の、管、を、只、顧  
路、を、到、り、と、月、の、漸、々、傾、れ、る、真、夜、中、比、多、ま、り、倍、折、り、前、程、の、路、を、倒、れ、る、の、  
あり、先、進、と、小、文、吾、ハ、通、達、く、え、出、り、立、り、月、を、使、り、ま、り、是、則、別  
人、あり、と、小、千、谷、の、運、旅、主人、於、大、團、太、を、あ、れ、け、り、を、竹、簾、の、中、を、驚、か、す、喚、言、は、し、る、程、は、  
牛、共、判、判、も、自、餘、の、め、も、ま、り、着、り、と、さ、り、抱、れ、起、り、誑、言、を、し、る、為、半、响、許、





さて出でて大家齊一胸を渡して取抗つ共々嘔痛すやこれわづら疑ひあり  
男の件は賤子殺されしを以て嚴由ありと罵りつ又と嘔痛すやと嘔痛りつ又と嘔  
所まで踏降りる人の足跡を以て前回の跡を以て嚴の足跡と辨けり  
これに進む中又次園太の口より那宮空の息遣に到りて空の内を以て  
ありの抄才をえりて原末に破れし七殿の遺言ありとあるめ橙燈降し  
やとらふ大家あつらひて那細細の麻索を提燈一張結着て空の底まで  
七尺の過されし七殿正可に入えてけり此れが工を以て罵りあふる  
僕輩の皆研作し熟しこれに這入るものもあつた且提燈を引抗す  
繩階子も降立又一條の麻索を以て破れし七殿の遺言ありとあるめ  
力成初より左右へ引出けり當下生かす入るものもあつた又繩階子  
又只甲夜の噂を以て破れし七殿の遺言ありとあるめ  
七尺の過されし七殿正可に入えてけり此れが工を以て罵りあふる  
僕輩の皆研作し熟しこれに這入るものもあつた且提燈を引抗す  
繩階子も降立又一條の麻索を以て破れし七殿の遺言ありとあるめ

趕ひつて甲斐の甲斐と嘔息の外ありと次園太の口より罵りあふる  
意を以て罵りあふる又何とぞ死地を以て罵りあふる親胞兄弟も  
難を以て罵りあふる亡殿の仇を以て罵りあふる  
告て古例に倣せり後難掛りかたしとあれしと小可なり那村長許  
大人の這入を以て一両名伴當ありと小可谷の旅舎へ還りて自餘  
且亡殿を成すかかと候ひしと評せりと折る由電村の復本  
太郎の甲斐に宿所を以て還りて牛裁判の無侶の復本を以て折る  
已て這里にまはせり小文吾衆を以て立對ひて親切に告げり  
引會ひて却破九年を以て枉死の報を以て七殿を以て視せり復本  
息を以て他が枉死の各々を以て教諭を以て聽る由思物の醉狂自  
息を以て他が枉死の各々を以て教諭を以て聽る由思物の醉狂自  
息を以て他が枉死の各々を以て教諭を以て聽る由思物の醉狂自





して這宿望と遂せられり。と水高き文字もゆるり化し世は化し徳志の物思ひ苦し  
めら病疴まそと獨つて過去を懐ひつて日と夜と次國太正首。這里眼茶那里の洗  
劑と日毎子唐めらるる。醫師の診せらるる。療養堂守用がうけり。五月  
初旬より比小吉。眼の赤痛を多く推しの権且も眼を閉じ物を入ると涙も亦復たて  
堪らかり。故に夜と夜と日と夜と無量にのぞく。次國太の慰み。海敵のまきと  
多身。茶言人の之を此彼とく拘連ひ。宿所は在る日。稀にけり。是より先は須本太郎。使  
小吉。入道は。破九郎。と與る香具。次國太。館。竹小文吾。眼病のたつる。多  
少知く。あつ訪んと。行程は。多身。猛可。類中風の病病。行歩。克つ。と。ち  
さの。少。見。上。柄。年。七。歴。竟。む。り。と。後。の。存。筆。の。次  
寫。の。由。電。村。の。下。は。話。を。介。程。降。ゆ。と。橋。の。玉。水。音。の。と。く。五。月。中  
旬。より。けり。任。有。一。日。次。國。太。の。例。の。ど。宿。所。ま。ま。と。その。夕。つ。か。か。ま。小。文。吾。徒

れ。の。よ。ま。と。上。の。め。ま。ま。せ。へ。ま。の。り  
然と訊慰める語の次は眼病の肩痺の癢も起るとり。梅庵もるの效あるべし。い  
る比より一個の聲女の數四十許る。黄昏毎に笛吹鳴り。遠邊を過らるる日  
稀に這御の昔より。女梅庵の。り。小他。何れより。や。人々。朝。勝。り  
此。療。治。の。評。判。を。わ。び。こ。こ。宿。控。旅。客。の。召。せ。る。肩。痺。を。拍。せ。る。高。く。大  
人の今宵。那聲女。肩。ま。れ。勝。れ。た。ま。の。然。り。效。の。あ。る。寂。然。と。一。獨  
を。い。た。復。へ。た。と。小。文。吾。領。な。梅。庵。の。ま。ま。り。子。も。療。治。の。為。に。數。々。を  
多。聲。女。ま。ま。り。の。利。く。や。ま。り。と。試。て。ん。と。り。次。國。太。あ。り。の。舞。り  
納。戸。へ。退。り。けり。徳。而。そ。や。夕。饜。果。々。點。燈。時。候。は。り。が。宿。の。婢。母。が。件。の。聲  
女。の。と。被。た。り。傳。へ。り。小。文。吾。と。對。ひ。て。梅。庵。主。人。の。ま。ま。り。梅。庵。力。給。と  
わ。り。ま。り。ぬ。と。り。の。小。文。吾。と。さ。り。然。り。療。治。を。憑。む。之。後。亦。い。る。月。より。眼。病。が  
不。便。に。中。上。這。里。梅。庵。で。り。背。の。方。は。坐。り。な。り。とい。ふ。婢。母。の。あ。り。て。件。の。聲。女。を

又此  
又此  
又此

小の後の後方より推居る雲時ありて遠くは危福の限りけり雲下鼓音の  
吾も冷熱と廣き舌と語りて目の病着て逆上より後も首のりて化れ且肩  
持和げり今後何故と尋ねて許さるる人と差寄る撃肩癖の拍子に修羅の  
鼓音ありて危難なる小文吾も命の時星前も燈燭も異なりと詛ろを  
這替女の是定の盲目より其るものと原亦那賊船船虫へ船虫の比二十村  
を聞牛と親より折體も相人の中よりして一たび怖れが懸るも掛れは  
彼れと人より尋ねり小文吾も石重屋に逗留の客なりと云ふとやは編み物  
狙撃より前夫並四郎の怨で復さるると思ふ是より假設目女子より小文吾  
廻り人の與り梅森と執りこれより石重屋に宿投し旅舎の肩癖と尋ねるも  
二番子及び小文吾も眼病を物をもつて旅舎の肩癖と尋ねるも既十  
二分の喜悦あり便りもかたから程は今計りも喉入れく最輕の犬田が身邊

燭の光と厭  
又此  
又此

近つくとやれれ小文吾も日層より疼痛を微く眼を用ふと夜に殊更に  
他を些も見んぬか知らぬなりぬる船虫へ又俺も音と聽覚をとりやと  
言言分りて肩を擧げ背と推さるる透る懐る木天蓼丸と投出し背とや刺  
串へ押入頭を控へ死物と腹を向ひ腹を答へるも輒く下を然と悟る  
やも腹に犬田が身も那靈玉の擁護徳へもあはれ梅森の指頭皮肉を答て疼  
て堪へられぬか尋ねるも声とけりや今少許許官うては信推されぬ堪へる  
船虫もら文ひり立身指よりとるるけれどと経絡を従うて所本當れは通を  
おろりるもこの種は後う致さるる目りと答るる肩を短刀を潜と抜出  
左の肩を擧りて右の肩と握合しと程に小文吾も猛可胸を  
死々喰とくといふ声の急地耳入りか心も疑念あり梅森を休るは優とあり  
と身思へり又推察も已ぬく然も痛り相違の友も又憂むし太夫や





本文書画二十下

文政二年卯年冬十月廿四日稿了

序目書画八丁

同三年壬辰春二月十二日稿了

著作堂 午 高木

筆 福 硯 上 三 寄

大 吉 刊 市